



僧堂●三十七世・原田祖岳老師が建立。毎朝4時半から坐禅の修行が行われる



山門●左右に仁王を配した仁王門。通称「赤門」と呼ばれている



経蔵●この中に膨大な経文が収められている。ひと回しすることで読んだとされ、功德にあたるという

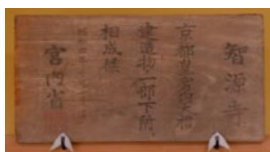
本堂(正面)と庫裏(左)の立派な入母屋屋根。右手には庭園が広がる



鐘樓堂●梵鐘は京極高広の奇進による。お堂は文化元年(1804年)の再建



宝光殿●昭和天皇御即位式に用いられた御殿の一部を昭和4年、本寺に払い下げられたもの



その際、宮内省より賜った書状。昭和4年10月1日とある



京極高治切腹の際に飛んだ血のあとがいまも残る血染めの金屏風。本来はもう一幅との対をなした。桃山後期から江戸初期の作品

宮津の繁栄を偲ぶ 修行の精神を学ぶ

寛政九年(一七九七年)、火災により創建時の本堂は焼失する。その七年後の文化元年(一八〇四年)に再建された本堂の天井には、現在、京都府指定文化財となっている二十枚の草花図が描かれている。この画は、江戸後期に華々しい活躍をみせた円



庫裏の学習室で袈裟を縫う修行僧の方々。一針一針、返し針で一心に縫い上げられる



高橋信善住職を囲む修行僧の方々。皆1~2年はこの寺に安居されるとい

山・四条派を中心とする京都画壇の絵師が競作したもので、当時の宮津の繁栄が偲ばれる。北前船の寄港地としても栄えた宮津では、産物だけでなく文化や芸術の交流の場としてもおおいに賑わったのである。

なお、焼失からわずか七年で再建された本堂や庫裏の建立においては、最後の藩主、本庄家が中興開基として援助したとされている。現在の金額に換算すると数十億にも相当するといわれる費用を要する再建が七年でなせたのは、それゆえのことである。寺には、京極家と並んで本庄家の位牌が厳かに祀られている。

その他にも本寺に伝わる宝物としては、聖観音菩薩立像の黄金仏がある。文化八年(一八二一年)、藩主本庄宗亮より下賜されたこの秘仏は飛鳥末期のものとされ、元興寺の高僧道昭の作といわれる。毎年七月二十七日の観音大祭にご開帳され、その法徳がいただけるということなので、参拝してみることをお勧めしたい。